

## 福岡・鴻臚館跡



所在地	福岡市中央区城内
調査期間	第五次調査 一九八九年（平1）四月～一二月 第六次調査 一九九〇年四月～二月
発掘機関	福岡市教育委員会
調査担当者	折尾 学・山崎純男・吉武 学
遺跡の種類	官衙跡・城郭跡
遺跡の年代	七世紀後半～一世紀・中世～近代
遺跡及び木簡出土遺構の概要	筑紫館・鴻臚館は、文献では六八八年（『日本書紀』持統二年二月己亥条、同九月戊寅条）から一〇九一年（寛治五）（『熾盛光佛頂大威德銷災大吉祥陀羅尼』扉書『平安遺文』題跋編四七九号）までその存在を確認できる日本古代の迎賓館である。その跡地は、福岡市中央区福岡城内にある平和台野球場内とその南側の

テニスコート一帯にある。鴻臚館跡を内包する福岡城は、福岡平野の海岸線のほぼ中央部、那珂川と桶井川とに挟まれた標高約三〇mの丘陵から派生する標高約一〇mの突端部に位置する。

鴻臚館の位置は、江戸時代以来現在の呉服町付近（那珂川と御笠川に挟まれた博多駅以北一帯）に求められてきた。しかし、大正年間に中山平次郎氏が、『万葉集』卷一五の遣新羅使の歌から現在の福岡城内にある平和台、すなわち当時の福岡第二四連隊兵営被服庫・武器庫・火薬庫付近に鴻臚館の跡地を推定し、さらにここから夥しい奈良・平安の古瓦が採集されるに至り、鴻臚館跡は福岡城内とする説が有力になった。ただ、戦後になってこの場所が開発の波にさらされる中で若干の発掘調査も行なわれ、奈良・平安時代の多数の遺物が出土したもの、明瞭な遺構を認めるには至らなかつた（第一次調査）。

このような状況のもと、一九八七年一二月から翌年一月にかけて、平和台野球場外野スタンド改修工事に伴う緊急調査が実施された（第三次調査）。スコアボードを挟んでレフト側約三五〇m、ライト側約三〇〇m<sup>2</sup>を調査した。その結果、古代の遺構として基壇状遺構SB一一、これに先行する布掘掘立柱建物SB一五、区画溝状遺構四条などを検出し、ここに古代の建物が良好な状態で保存されていることが明らかになつた。鴻臚館跡であることを窺わせる多数の遺物を包含する土坑も検出した。その他、江戸時代の礎石建物や、

明治から昭和にかけての陸軍第二四連隊関係の建物も検出した。

このような成果を受けて福岡市は、長期的展望をもつ計画性のある発掘調査を進め、鴻臚館跡の全容を解明するため、鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その指導のもとに調査を進めていくことになった。

一九八八年度の調査（第四次調査）は、野球場南側、テニスコート北側の緑地帯で行なった。調査面積は約一〇〇〇m<sup>2</sup>である。この調査区で特筆されるのは、大型南北棟礎石建物二棟の検出である。このうち西側の礎石建物SB三一は、梁間二間、桁行は九間分確認し、さらに調査区外の南北に伸びる。柱間は桁行・梁間とも一〇尺（一部一尺の箇所あり）、東西に雨落溝を伴う。東側の礎石建物SB三二是、SB三一の基壇から約三〇尺の間隔をもって基壇を設けており、桁行七間分を確認し、さらに南北とも調査区外に伸びる。梁間は身舎二間で東西両面に庇を伴う。柱間は桁行・梁間とも一〇尺だが、桁行で一箇所一尺の部分があり、ここには、建物を東西に横切る排水溝が設けられている。また、SB三一同様東西に雨落溝を伴う。建物以外では、九世紀後半の各種遺物溜があり（SK三八など）、礎石建物の基壇を切ることから、その存続の下限を知る上で重要なである。他に、江戸・明治期の遺構も確認した。

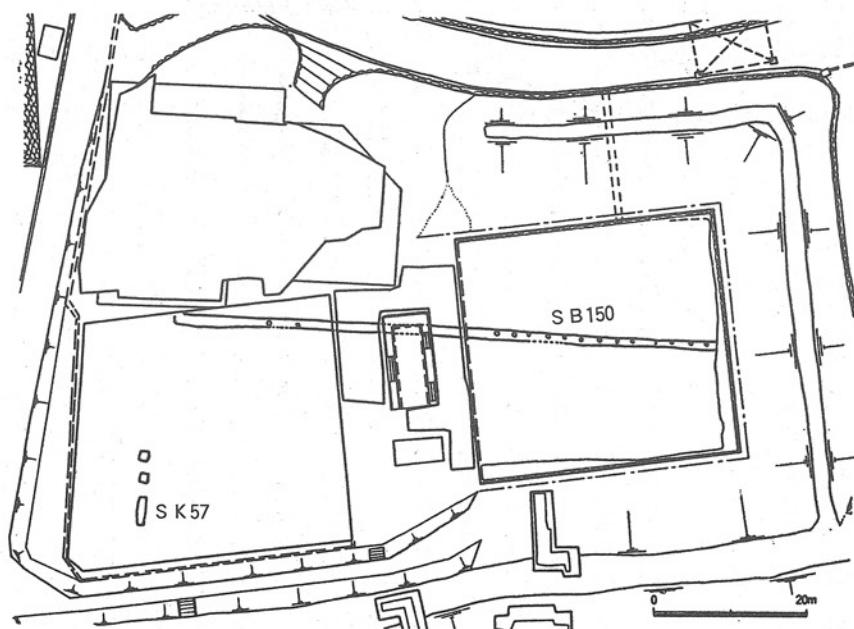
一九八九年度の調査（第五次調査）は、第四次調査区の南に隣接するテニスコート南側で実施した。調査面積は一一五五m<sup>2</sup>である。そ

の結果、第四次調査で検出した西側礎石建物SB三一の南延長部分をさらに七間分検出した。但し、その南側は江戸時代の濠（または池）によって破壊されており、南端は確認できなかつた。一方、東側礎石建物SB三二は、本調査区北端で、東西棟礎石建物SB五〇によつて、西側礎石建物SB三一と結ばれていることがわかつた。SB五〇は、桁行七間分、梁間一間分（ともに柱間一〇尺）を確認した。但し、梁間については、棟筋北側雨落溝と対称となる南側雨落溝が前述の江戸時代の濠によつて欠落することから、SB三一と同様二間と考えられる。SB三一とSB五〇が接する部分には、SB五〇を南北に横切る排水溝がある。なお、東側礎石建物SB三二の南端はSB五〇に接しており、SB三二がさらにSB五〇の南に伸びるか否かは、江戸時代の濠に破壊されていて確認できない。

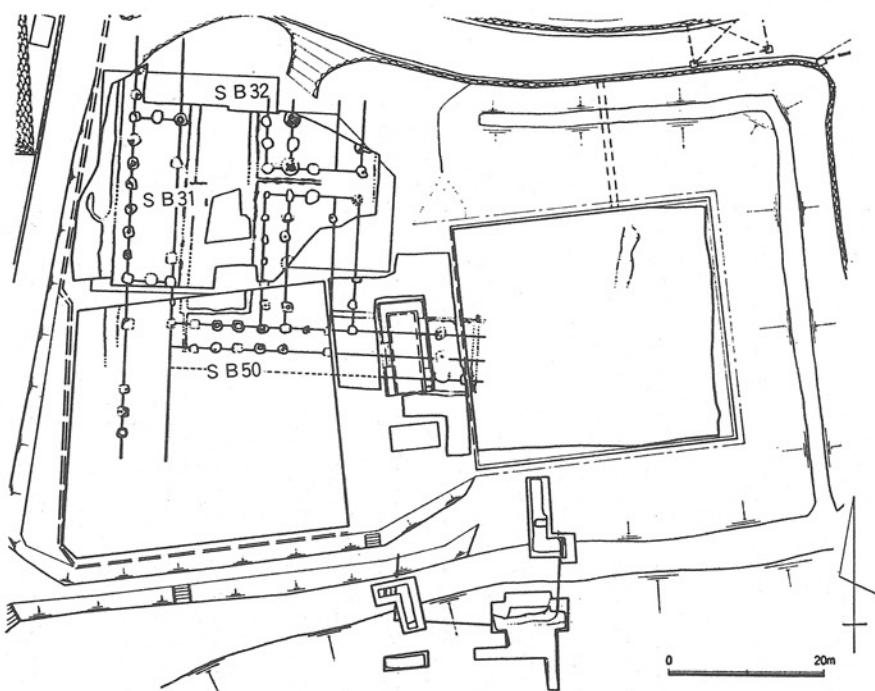
礎石建物の下部には、幅約一・二m前後、深さ約一・六mを測る布掘掘立柱遺構SB一五〇がある。柱間は七尺等間である。SB五〇の北側雨落溝の直下を東西に走り、西端は、SB三一棟筋東側礎石列の位置で北へ直角に折れると思われ、東端は、一九九〇年度調査区（後述）の東側テニスコート下を東に走ると推定された。鴻臚館以前の筑紫館にかかる屏と考えられる。

この他、礎石建物の上限を示す遺構として、八世紀前半の土坑SK五七（木簡出土。但し、掘り下げは一九九〇年度）・六九が、下限を示す遺構として九世紀後半の土坑SK五六・六一などがある。なお、

1990年出土の木簡



SB150・SK57位置図



礎石建物SB31, 32, 50位置図

テニスコート南側の土墨下の調査も行ない、江戸時代の東西方向の土墨を検出した。その中央部では、東西約二一・五m、南北約一二・四mの基壇と思われる遺構を囲む雨落溝を確認している。鴻臚館の南門であるという意見もあるが、今後の精査に期待したい。

一九九〇年度の調査（第六次調査）は、第五次調査区東側のテニスコート、両調査区の間の藤棚の周辺、及び第五次調査で検出した土坑（SK五七・六九・七〇）の掘り下げも行なった。その結果、第六次調査区の範囲では、鴻臚館関連の遺構の残存状況が悪く、SB三二の東面庇の延長部分、SB五〇の東延長部などを検出したにとどまつた。SB三二がSB五〇の南側に伸びるかどうかは、江戸時代の濠の掘削がこの部分まで達していたため、確認できなかつた。SB三二とSB五〇の接点部分、SB五〇の北雨落溝の延長部分には、排水溝が設置されていることがわかつた。SB三二や、SB三一とSB五〇の接点部分にある排水溝と同様のものと考えられる。SB五〇の南雨落溝を検出し、SB五〇が当初の予想のとおり梁間一間であることが確定した。なお、江戸時代の遺構はよく残つており、掘立柱建物三棟以上を検出した。

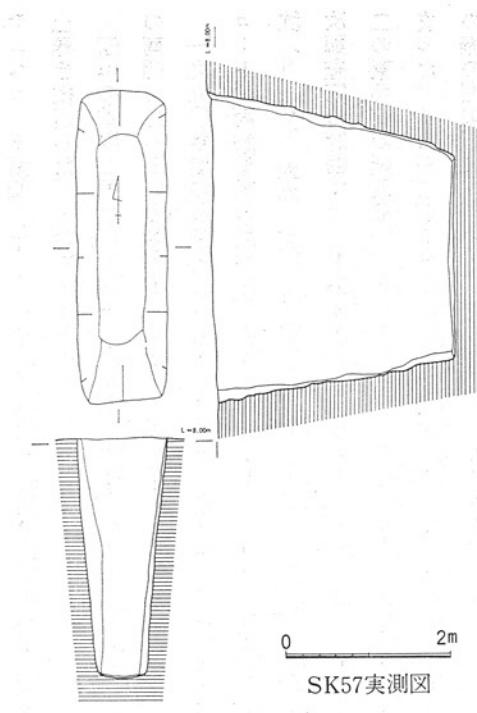
次に、これまでの調査で出土した遺物の概要について記す。遺物は多種多様で、しかも優品が多い。瓦類は七世紀から一一世紀までのが確認され、ほぼ文献の年代と一致している。量的にも非常に多い。中でも鴻臚館創建期に使用されたと思われる鴻臚館式瓦が

最も多く、出土量の三分の一以上を占める。鴻臚館式瓦は大宰府政府でも使用されているが、そもそもどちらのために製作されたものか今後詳細な検討が必要であろう。

瓦類以外では、外国産陶磁器の多さがめだつ。出土した土器全体の六七割が外国産陶磁器で占められており、出土量もこれまで日本で出土した古代の外国産陶磁器の総量をはるかに凌いでいる。内訳は、中国陶磁器、新羅陶器、イスラム陶器と各国のものがあるが、量的には中国産のものが最も多く、八世紀～一世紀にかけてのものがあり、九世紀後半以降増加する。中でも浙江省越州窯系の青磁器が最も多く、ついで湖南省長沙窯や河北省邢窯、定窯の白磁器があり、唐三彩も少量ある。新羅陶器は量的には少ないが、七世紀後半から各時期のものが見られ、イスラム陶器は数十片、数個体分あるが、時期的にも幅がありそつて今後の検討課題である。この他の遺物としては、梵鐘の鋳型、製鉄関連遺物、鉄器、貨幣などがある。木簡が出土した遺構はSK五七である。主軸をほぼ真北にとり、検出面で南北径三・九五m、東西径一・一mの隅丸長方形プランの土坑で、頁岩質の地山を八五度の急傾斜で掘削している。坑底は南北径二・六m、東西径〇・六m、底は平坦であり、深さは三・一mを測る。

SK五七の土層は大きくみて上層と下層に分けられる。上層は深さ一・四m付近まで自然堆積を示すレンズ状の断面がみられる。下

1990年出土の木簡



層は厚さ一・五五mで水平に堆積したものと考えられ、ウリの種を多量に含み、多量の木製品や須恵器の他、新羅焼、それに自然遺物が出土した。木簡が出土したのはこの下層からである。

帯広畜産大学中野益男氏による土壤分析の結果、本土坑内には哺乳動物の排泄物に特徴的にみられるコプロスタノールが三七%の高い比率で検出されており、土坑の用途が便所であつた可能性を示している。よって、出土した木簡は、大部分は籌木として再利用されたものであろう。

木簡出土土坑SK五七は、同時期に比定される東西掘立柱遺構S

B一五〇の西端より約二五m南の位置にある。SB一五〇を屏状の遺構と考えれば、屏の外に位置したものと考えられよう。

SK五七出土木簡の時期は、里制を示すものがあることから、七〇一年から七一五年の可能性が考えられるが、天平の年紀のある里制木簡の出土も知られており、一概には断定できない。郷里制または郷制を示す木簡もあり、七一五年を前後する時期、八世紀前半と考えておく。鴻臚館以前の筑紫館に関連する遺物といえよう。

木簡以外の文字資料としては、木簡と同じSK五七から墨書須恵器「城」が出土している。これは、大宰府水城と大宰府政厅南面西側で出土の類例がある。前者は「水城」で八世紀前半、後者は「大城」で八世紀後半であるが、今回の墨書土器の年代を示唆するものといえよう。他に「二坊」と針書された漆皮膜(SK六九出土)があり、建物もしくはそれを包含する区画を表わすものと思われる。時期は八世紀前半と考えられる。

以上、鴻臚館跡のこれまでの調査の概要と木簡出土遺構について概略を述べた。鴻臚館跡の調査はまだ緒についたばかりであるが、最後にこれまでに明らかになっている時期区分をまとめておくと、次のようになる。

- 第一期 七世紀後半、「筑紫館」前期、掘立柱建物の時期
- 第二期
  - (A) 八世紀初頭から九世紀中葉、「筑紫館」後期・  
「鴻臚館」初期、第一次礎石建物の時期

(B) 九世紀後半、「鴻臚館」前期、建物拡張・改造期、  
第二次礎石建物の時期

第三期 一〇世紀以降、「鴻臚館」後期、現在までのところ遺物の廃棄坑のみの確認、宋商往来の時期に推定  
このうち第二期の上限までは、大宰府政庁跡の時期区分と一致する。大宰府政庁では第二期の下限を天慶の乱の一〇世紀中葉に求めているが、鴻臚館跡では第二期が九世紀半ばを境に (A) (B) 二時期に分けられる。鴻臚館跡では、これまでのところ天慶の乱による焼失の痕跡は認められない。また、第三期の終焉は、大宰府跡では一二世紀とされるが、鴻臚館跡では未確認であり、文献による限りでは、一一世紀末までの存続が確認されている。

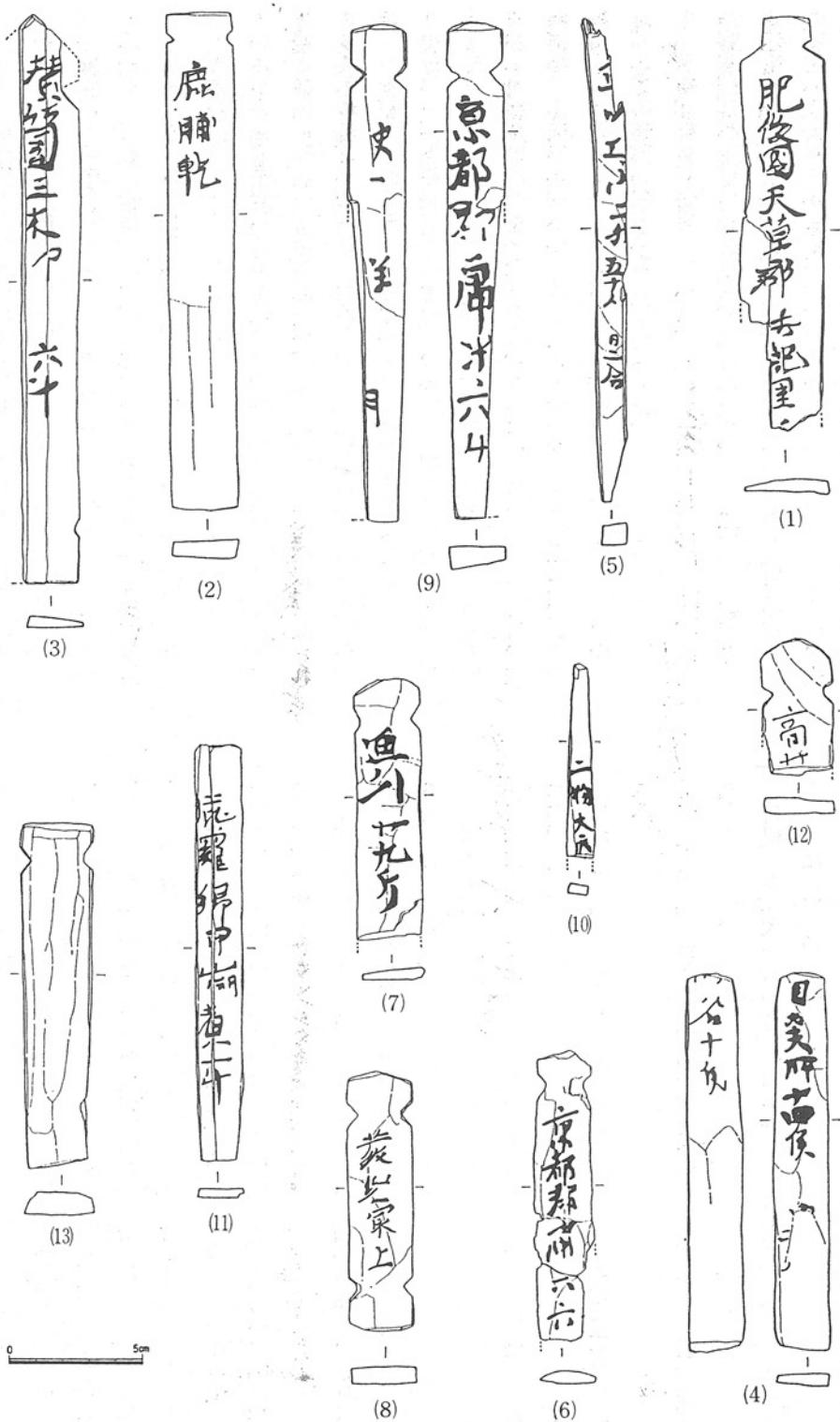
なお、縄文・弥生・古墳の各時期の遺物も出土しており、今後筑紫館・鴻臚館以前の遺構が確認される可能性がある。また、鴻臚館廃絶後、福岡城築城までは、これまで空白期と考えられてきたが、第四～六次調査で地下式横穴などの遺構や若干の遺物の出土をみており、この時代の状況も明らかになりつつある。

8 木簡の釈文・内容

出土した木簡は七三点あって、文書木簡と付札であるが、大部分は付札である。以下、釈読できたものについて記述する。法量の下の漢数字は大宰府鴻臚館跡出土木簡番号である。

(1)	「▽肥後國天草郡志記里□」	(155)×31×5 039 1
(2)	「▽鹿脯乾□□」	186×24×7 032 四八
(3)	「▽讀岐国三木郡□□六斗▽」	213×(21)×4 031 三八、四五
(4)	・目大夫所十四隻 □□	
(5)	□□玄米一升 五十人 日一合	(152)×20×5 011 11四
(6)	□□魚□十九斤	(181)×12×9 081 六六
(7)	「▽京都郡庸米六×	(110)×21×5 039 八
(8)	「▽□綱最上▽」	(97)×24×4 039 七
(9)	・「▽京都郡庸米六斗」	98×24×7 031 11五
(10)	・「▽□□□□□□□月」	186×21×8 032 111
(11)	「庇羅鄉甲□煮一斗」	(73)×(11)×4 019 410
(12)	「▽高□」	156×17×4 011 1111
(13)	「▽鞍手郡□」	(51)×26×6 039 411
		(130)×27×9 039 411

1990年出土の木簡



S K57出土木簡

(1)は、鴻臚館跡で最初に文字を確認した木簡である。肥後国天草

郡志記里は、現在の熊本県天草郡苓北町志岐付近にあたる。郡里制の木簡であり、七〇一年（大宝元）から七一五年（靈龜元）までのものと一応考えられるが、天平年間の年紀のある郡里制木簡の存在も知られており（平城宮木簡四〇四号、四一七号など）、八世紀前半代とみておきたい。

(3)の讀岐国三木郡からの荷札は、大宰府管外からのものであり、大宰府跡出土木簡にも例をみない。東国の防人が西海道に派遣される場合の応接や、遣唐使や遣新羅使など鴻臚館に関係する人々の接遇を、往来先の国司が任されていたことが想起されよう。

(4)は、二次的に整形されており、文字も一部削られている。「目

大夫」は、五位の目とも考えられるが、平安時代中期以降の用例では、五位（大夫）に昇った元目とすることになる。大宰府では、五位は大宰大式、大宰少式の位であるので、某国の目が大宰大式、大宰少式になったのであろうか。大宰府の蕃客・帰化・饗讌は、大宰帥、大宰大式、大宰少式の職掌であった。

(5)も二次的に整形されている。(6)は丸太の表皮部分を残す。豊前国京都郡は、現在の福岡県京都郡にあたる。(10)も二次的に整形されている。(1)の庇羅郷は肥前国松浦郡に属し、現在の長崎県平戸市にあたり、平戸に関する最古の資料となる。(13)は肉眼では読めず、赤外線テレビで判読した。筑前国鞍手郡は、現在の福岡県鞍手郡にあ

たる。

(1)の天草郡、(1)の庇羅郷、(6)(9)の京都郡は、前二者が遣唐使と深い関係にあり（『日本三代実録』貞觀一八年三月九日丁亥条）、京都郡は博多湾で新羅海賊に襲われた豊前国の貢綿船が想起される（『日本三代実録』貞觀一八年六月一日辛丑条）。これらの木簡が大宰府経由ではなく、鴻臚館直送であった可能性が考えられよう。調や中男作物などの荷札で品目のわかるのは、(2)の鹿脯のみであるが、(1)の甲□は、甲贏、すなわちウニの可能性がある。

今回出土した木簡には、半截されたものが非常に多く、これらの木簡が、籌木として二次的に利用されたものであることを示していると考えられよう。

## 9 関係文献

福岡市教育委員会「鴻臚館跡」I 『福岡市埋蔵文化財調査報告書』二七〇 一九九一年

折尾 学「鴻臚館跡推定地の発掘調査」『日本歴史』四八四 一九八八年

折尾 学「鴻臚館跡の近況について」『日本歴史』五一五 一九九一年

折尾 学「大宰府鴻臚館跡調査考」（児島隆人先生喜寿記念論集『古文化論叢』一九九一年）